
森に降る雪

おせろ道則

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

森に降る雪

【Nコード】

N6895D

【作者名】

おせる道則

【あらすじ】

介護用アンドロイドとして造られた「私」は、博士を愛しているのに廃棄処分にされてしまう。脱走した「私」が逃げ込んだ先は、雨の降る森だった。

あ。真夜中の森の草花が、私の視界いっぱいにせまった。私は顔から地面にふした。起き上がるうと、腕に力を込めたけれど、キチキチと関節のネジが音をたてるだけで、私はもう起き上がれなかった。森の深いところで、全身メタルの私の体が、ほのかに月あかりを反射させた。

金属板と、コードできた、アンドロイド。私の体に防水機能はついていません。

私は眼球をくるくる動かして、あたりをくまなく視察した。追っ手の気配はなかったので、私はひとまずほっとした。自分の首筋からはなたれている、鉄錆びの嫌な臭いに私は気づいた。首筋のバネが錆びつきはじめていたのだった。

「もろいものね……三十分、雨に打たただけでこうなっちゃうなんて」全身に降りかかる雨を、一粒一粒凝視した。研究所の中から見ていたときは、幻想的な風景でしかなかった「雨」。外に出れば、現実の厳しさにさらされる。頭の中からつま先まで、全身メタルのアンドロイドは、この森には似合わない。本来私がいるべき場所は、この森の向こうの研究所。そこで私は作られた。そしてそこから脱走してきた。

「博士……」私は言った。「私、もうこれまでみたい」

博士の姿が、脳内メモリーを駆けめぐった。ラボで私は博士と出会った。私は博士に創られた。

「やあ、気分はどうだい？」目覚めたとき、言われた最初の言葉がそれだった。細粋ほそくのめがねを掛けた男が、私に向かって微笑んだ。そのとき私には、まだ下半身が備わっていなかった。首をウインウインと鳴らしながら、私は動く右手で、目の前のその人をなでながら答えた。「ワルクナイデス」

全身メタルの私の体を、博士はちょっとまぶしそうに見つめてい

た。私の存在意義を、博士は事細かに説明してくれた。この世界には、心身に不都合を抱えた大勢の人がいて、私はその人たちのお世話をする「介護アンドロイド」のプロトタイプなのだと言われた。「君次第で、僕の研究は大きく弾みをつけるだろう」と博士は言った。私はこくりと頷いた。実際、市場に出す前に、いろいろなデータを取らなくてはならないそう。実験を兼ねて、私が最初にお世話する人は博士となった。私は介護アンドロイドとして、掃除をして、食事を作った。たくさん博士と話した。順調に博士との生活が過ぎた。なのに、私は廃棄される事になった。

「これは、もう使い物にならないから処分だ」管理ファイルのパタリと閉じて、博士は、私の面前でそう言った。私は一瞬、聴覚機能の故障かと思った。ちょうど充電の時間帯で、私は博士の頭上二メートルのところ、宙ぶらりんになっていた。背中のコードがきしりと鳴った。私は口をかぱりと開いて博士を見下ろした。そんな私を見ようともしないで、博士はつぶやいた。「これは欠陥品だった」「いいんですかい？」ブルーの作業着を着た男が、博士に繰り返して尋ねる。

「いいんだ、さつさと ダストに突っ込んでおいてくれ」
私は、半開きの口をふるふると震わした。そして目だけで横を見た。私のデータをもとに造られた、五百体のアンドロイドが、同じく宙ぶらりんになっていた。博士がくるりと踵を返した。私は背中に痺れを感じた。

逃げなくちゃ！

突然のことで、博士はショックを受けたでしょう。充電中は動けないはずの私が、博士の頭上で、マリオネットのようにがじがじやと暴れだしたのだから。暴れに暴れて、私は背中のコードをぶつりと切った。充電カプセルから飛び出して、博士の頭上をジャンプして、一目散に部屋の窓ガラスに向かって走った。私は強化ガラスを突き破り、高さ三〇階のその部屋から、外の芝生に飛び降りた。ラボの全体から、サイレンが猛々しく鳴り響いた。私は恐怖と悲

しみを抱え込んで、とにかく逃げた。

早く、早く、ここから逃げなくては。今、逃げなくては、私はゴミ箱行きになる！

警備アンドロイドの搜索から逃れ、ドールベルマンロボの追跡にも負けず、私はラボに張り巡らされた金網を越えて、その先の森に入った。逃走しながら、私は泣いた。心は博士で一杯だった。ひどい、ひどいわ、どうして？ 博士。私を突然ごみ扱いするなんて。私は逃げた。一番離れたくなかった博士のもとから、全力疾走で逃げたのだ。そして静まりかえったこの森の深いところで、私はこうして横たわっている。

夜の森は静かだった。ふくろろの声も聞こえなかった。さらさらと雨の降る音だけが霞かすみのように鳴るだけだった。倒れたまま、私は地面に近い視線で、草木を眺めた。生命力が感じられた。暗い森の中でも、闇に隠れることなく、命が脈々と息づいていた。

「いいな……」

発音するたび、口関節がウィンウィンと音をたてた。こんなメタルの鉄くずでも、この子たちの寝床ねどこになるかな？ メタルを寝床にしてくれるかな。緑の葉っぱを茂らすかな。

「あ」

何とかこっちは動きそう。ギイギイと音を鳴らしながら、私はころうじて動く右手を、自分の目の前に持ってきた。指の関節をジュイジュイと動かしてみた。関節の隙間からのぞく、無数のコードが、パチパチと光を放っていた。

「動いてるじゃない」

私は涙をこぼして言った。「まだ作動してる」

博士は、どうして私を欠陥品扱いにしまったのか。私は全く理解できなかった。私はこんなに「人」らしいのに。私はぼろぼろと泣いて博士を思った。

もともと、あのラボでの実験テーマは「人の気持ち分かるアンドロイド」を創ることだったんでしょ？ だったら私は適任だった

じゃない。生まれたときから、博士と友達になって、あなたとたくさん話をしたわ。親身になってお世話をして、そうよ、ある日博士が病気で寝込んだときには、本当に、本当に心配したわ。元気になるってくれた朝には、私は嬉しさのあまり、涙をこぼしてしまった。あなたはびっくりしてたわね。私も正直驚いたわ。他の試験体は、相手の脈拍や心拍数を感知して、向こうが望んでいるなら人工^{るいせん}涙腺をゆるませて、「泣く行為」をするだけだった。けれど私は違った。あの時、あなたの安らかな顔を見て、どうしても涙があふれたの。「流す必要アリ」と思って出したんじゃないかった。出たのよ。自然に涙があふれたの。

「ひどいわ博士」

雨がパチパチと、私のメタルの体を叩いた。どうして？ 私は博士の望んでいた、最高のアンドロイドだったでしょ？なのに、ダスト行きなんて。

いつそう涙が眼球からあふれた。あふれた涙は、あごをつたって、私の首関節の隙間に流れ込み、いつそう私を錆び付かせる。

「情けない」

私は、うつつとしゃくり上げた。ぎゅんぎゅんとメタルがきしんだ。もう、博士のもとには戻れない。博士を見て……あなたを嫌いになりたくない！

「博士……」

私はぎゅっと瞳を閉じた。

「愛しているから、見逃して」私のすべてを見逃して。

私は、ある日を思い出した。

「服を……着たいのですが」

私の申し入れに、博士はしばらく絶句していた。

「どうして？」

含み笑いで尋ねる博士に、私は何も言えなかった。恥かしかった。博士の前で、メタルの肌をさらしているのが。私は少しうつむいて、博士はちよっと困惑していた。

「消えてしまいたい」

私はゆっくりくりまぶたを開いた。すると、私の目の前に、ひとひらの何かが舞い降りた。

「雪……」

雪だった。さっきまでの雨が、雪に変わって森に降ってきた。不思議。この国は、過去十年間、雪なんて降ったことなかったのに。私、実物の「雪」を見るのは初めてだわ。これが雪なのね。なんて儂いんだろう。

雪は、しんと森のすべてに積もり始めた。草木に、花に、メタルに、小枝に、あらゆるところに降り積もった。私の目の前にあった右手も、雪に埋もれて見えなくなった。

「そうよ」

私は微笑んだ。

「そのまま、すべて、隠してしまつて」私のこの、錆びた機体も、中途な心も、こんな末路も、愛も、記憶も。すべて儂い綿毛の下に、埋もれてしまつて。

そんなことを思っている間に、頭の中にも積もり始めた。頭の中に降る雪は、どんどん私の記憶を消した。徐々に私は朦朧もろろとしてきた。それがすごく心地よかった。不安も恐怖も消えたけど、ああ、やっぱり私はここまでできて、博士を思い描いてしまった。途切れ途切れのメモリーを、懸命につなぎ合わせて博士を思った。

記憶の博士は、今も私に微笑みかける。

「ハカセ……」

私は今も、あなたを思う。始まりから終わりまで、あなたが私の存在意義なの。

人の心が分かるのに、人の心を持つちゃダメって、そんなの無理よ、そうでしょ博士？ 望み通り私はここで壊れるから。次はもう少し、にぶいアンドロイドを創ってあげて。

雪よりも冷たいメタルの体で、博士を愛した私にとっては、振りつもる綿毛の毛布は、泣きたくなるほど優しくかった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6895d/>

森に降る雪

2009年3月24日11時21分発行